

第17回 日本生殖内分泌学会学術集会を終えて



会長

吉村 泰典

慶應義塾大学
医学部産婦人科学
教授

昨年12月8日に東京ステーションコンファレンスにおいて、第17回日本生殖内分泌学会学術集会を開催いたしました。

生殖内分泌に関わる臨床医家と基礎研究者が集い情報交換を行う学際的な本会学術集会の特性を鑑みて、招請講演には、米国のベイラー医科大学の Martin M. Matzuk 教授をお招きしました。可逆的な男性避妊を可能にする薬剤の開発、常位胎盤早期剥離のモデル動物の樹立、卵巣腫瘍の発生メカニズムの解明など、生殖生物学・内分泌学の多岐に亘る最新の研究成果についてご講演いただきました。

シンポジウムでは、「生殖内分泌における酸化ストレスとエイジング」のテーマのもと、山口大学の白石晃司先生には「精索静脈瘤における酸化ストレス」、慶應義塾大学の浜谷敏生先生には「卵子・着床前期胚における酸化ストレスとエイジング」、山形大学の高橋一広先生には「血管における性ステロイドとエイジング」、京都大学の万代昌紀先生には「子宮内膜症の発がん酸化ストレス」と題して、さまざまな角度からの素晴らしい研究内容をご紹介いただき、活発な討論がなされました。

東京駅に直結している会場の地の利もあって、一般演題の数は48題に上り、参加者も200名に迫る盛況ぶりとなりました。質・量ともに学術的ポテンシャルの高い一般演題が目白押しで熱心な議論が繰り広げられるなか、学術奨励賞として、渡辺雄貴先生、田村 功先生、宮崎 薫先生の3演題が選ばれました。

最後に、本学術集会をご支援いただきました苛原理事長をはじめとして、理事・評議員の先生方に深く感謝申し上げます。また、座長を担当していただいた先生方、ご参加いただきました多くの会員の皆様、そして本学術集会の運営を陰に日向にと支えていただいたすべての皆様に厚く御礼を申し上げます。本集会が皆様のこれからのさらなる研究と臨床に貢献することを願いながら報告を終わります。